■　みずつち座談会　第２回プレイベント　「イ･スギョンの芸術世界」

出演：イ･スギョン（本芸術祭参加作家）

高晟埈（元新潟県立万代島美術館主任学芸員／故人）

日時：平成 27 年７月 11 日（土）午後５時から

会場：ＮＥＸＴ２１　１Ｆアトリウム

通訳：鄭賢淑(チョン・ヒョンスク)

左：イ･スギョン氏、右：高晟埈氏　（中央：通訳の鄭賢淑氏）　Photo:Osamu NAKAMURA

イ･スギョン氏　Photo:Osamu NAKAMURA

（　高晟埈　）　※以下、（　高　）と明記

みなさん、こんばんは。新潟県立万代島美術館の高晟埈と言います。

それではスギョンさんの作品をご紹介しながら作品の意味について、あるいは

イ・スギョンさんの人生そのものについて、聞いてみたいと思います。

今までバンクーバーやシドニーなどでアーティストとして活躍されています。越後妻有で行っている大地の芸術祭にたしか以前出品されたと思うのですが、新潟市内までいらっしゃるのは今回初めてでしょうか。

（　イ・スギョン　）　　※以下、（　イ　）と明記

初めてです。

（　高　）

新潟の神社などあちこち回られて、写真などを撮られたようですが、新潟の町の印象はどうでしょうか。

（　イ　）

今回はあまりにも短い滞在でしたので、今度、長く滞在して新潟について考えたいと思います。

（　高　）

それでは、今回、旧二葉中学校で展示している「Translated Vases」という作品も含め、イ・スギョンさんの作品について、スライドを見ながら、お話しいただきたいと思います。

（　イ　）

『まず、日本語であいさつを。初めまして。私は韓国のアーティスト、イ・スギョンです。今日はありがとうございます。よろしくお願いします。』

今年、韓国の大邱美術館で私の個展を行いました。私が 15 年間で制作した作品です。また台北市の美術館 [1] でも、今、個展を行っています。その２か所の作品をこれから紹介します。

展示会のタイトルは、「When I become you」です。これから始めます。

この作品は上に二つのシャンデリアがありますが、二つのシャンデリアの中で左側にあるランプはわざと故障したかのように点滅するようにしています。そして、後ろのモニターには今までのパフォーマンスに関する記録のビデオや写真を流しています。

韓国の踊り手が踊っている写真があります。彼女は踊りの先生で、先生が作業に参加してくださいまして、この写真はそのときのオープニング公演です。その踊りの基本は空と土に敬意を表し、宇宙のすべてのものが生まれてくることを祈るものです。

今、ご覧になっている写真は、韓国の大邱美術館と台北の美術館で展示したものです。こちらも左側のシャンデリアが点滅していて、下に京劇の踊り手がいます。

これは私が 2004 年からずっと続けている作品です。タイトルは「Daily Drawing」といいまして、毎日一つずつ絵を描いて一つの作品を作ります。これは少女たちが眠っている姿で

[1] MOCA Taipei　イ・スギョン「When I become you」展（2015.6.9-8.2）

すが、現代社会はとても忙しいので、絵の中で彼女たちに休憩を与えるために描きました。

これは描いたものではなく、３Ｄプリンターの機械で作り上げたものです。

次のは 2004 年に心理カウンセラーの勧めにより始めた絵です。これは曼荼羅治癒（まんだらちゆ）といい、絵を描きながらストレス解消ができます。私は美術家なのでサークルの中にいろいろな絵を描き始めました。

これは去年始めたもので、１か月に１回催眠にかかり、その催眠状態で経験し見た、前世をイメージして描いたものです。前世の中で私は黒人の男性で、部族のために戦った末、殺され、木の上に吊されました。その人物を描いたものです。

これは「Painting For Out Of Body Travel」というタイトルで、装置をつけたままずっと絵を見続けていると、その絵の中に入り込むことができるという説明が書いてあります。この絵の右側にハンドルがあり、ローラーがあります。このローラーで絵を小さく、また大きくすることができます。

これはフランスのニースで 14 人のインタビューを行い作りました。フランスは昔、ベトナムなどを統治していました。そのときにアジアからたくさんのものを持ってきましたが、今現在、それを見てどのようなイメージを抱いているのかを聞いて、私自身、市場などにも行って素材を集めました。そこから作り出したイメージで制作したものです。

これはお寺によくある仏陀の後ろ姿を屏風に描いたものですが、六角形の中に入って屏風の中に囲まれると瞑想するのにとてもいいです。タイトルは「Portable Temple」です。

これは昔の高麗の仏画の技法で描いたもので、左右対称です。

これは「Tear drop」というタイトルです。韓国の景福宮に展示されています。宮殿で起きている悲しい歴史や、特に女性たちの悲しい生涯をイメージして作ったものです。これはステンレスで作られていて、すべてのラインが LED ライトで、反射できるように作りました。

これは私の作品の中で一番知られている「Translated Vases」という作品です。

これはソウルのサムソン美術館リウムに設置されているものです。タイトルは「月の裏側」です。本来、韓国人は白磁をとても崇拝しています。

これは北朝鮮のフェリョンの陶磁器の破片をいただいて作ったもので、このタイトルは「THOUSAND」といいます。実際に 1,000 個の陶磁器が展示されています。

これは「The Very Best Statue」という作品です。これは越後妻有の大地の芸術祭に出したものです。この作品の特徴は、アンケートを通して各パーツごとにそこの住民たちが一番好きなものを調査して、それを基にして作りました。韓国のアニャンやイギリスのリバプール、ウクライナ、台北でもそれぞれ作品を作りました。

The Very Best Statue　2006　（協力：OTA FINE ARTS）

これは今年始まったプロジェクトで、1921 年の韓国の画家の作品の写真を見てそのまま再現したものです。タイトルは「大家に絵を習う」というものです。私は西洋美術を勉強しましたが、西洋と関係のない作品の中から個人的に好きな絵を選び、そこから新しく学ぶために始めました。これは台湾の作家の作品ですが、右側が作家の写真で、左が私が模写したものです。これは台湾の画家の絵です。この制作はずっと続けていまして、11 月には中東の作家の絵を行い、イランとサウジアラビアで展示する予定です。日本の作家も模写したいと思っています。

（　高　）

イ・スギョンさんの作品といえば、今回、旧二葉中学校のベースキャンプにも展示される、「Translated Vases」のシリーズが一番知られています。

今回お話しいただいた中でも分かるように、本当に多岐多様にわたるいろいろな制作をされています。最初に出てきました「Daily Drawing」は、本当に毎日描かれるそうです。先ほどお伺いしたら、最近は忙しすぎて毎日は描いていないということですが、それから始まって、越後妻有では、目とか鼻とかそれぞれパーツごとに、あなたはどれが一番好きですかと聞き、実際に作り上げていくので、都市ごとにそれぞれ違うのです。

そのほかにも、本当にいろいろなコンセプチュアルな仕事をたくさんされています。模写の新しいシリーズも出てきましたが、イ・スギョンさんの陶磁器の作品以外のいろいろな姿を知っていただけたかと思います。

それでは、これから皆さんが実際に旧二葉中学校のベースキャンプで見ることになる作品について、聞いてみたいと思います。

Translated Vases

水と土の芸術祭 2015　Photo:Osamu NAKAMURA

この作品は金継ぎをしています。壊れた陶磁器の破片を金継ぎする。普通、金継ぎというのは元の形に戻したりするものですが、イ・スギョンさんの場合は金継ぎをすることによってどんどん形が変わっていきます。

そのことによってとても独特の芸術世界になっているわけですが、どういうきっかけでこの作品が生まれたのでしょうか。そのきっかけについて教えていただきたいと思います。

（　イ　）

最初のきっかけは 2001 年に､イタリアで開かれた陶磁器展示会に参加することになったことです。そのときは陶芸家ではなく、現代美術家が参加する展示会でした。その中で私は白磁の美しさを、昔の韓国の詩人の詩を込めて展示したかったので、イタリアの陶芸家に頼みました。その結果、その詩をイメージして作ったものがとても美しい陶磁器になりました。

2001 年のある日、私は朝鮮の白磁を伝統的な方法で作る陶芸家の作業場を訪問しました。彼についてのドキュメンタリーの中で、その陶芸家が小さい傷や、何か少しでも気に入らないところがあるものは全部破壊していることを知り、私はとてもショックを受けました。イタリアでは詩を基にして作品を作り出しましたが、これを見て私は違うことを考えました。その破片を陶芸家からいただいて、傷をつないで新しい作品を作り出しました。すでに壊れたものですから、もとの世界には戻ることができません。この作品は作品を作り出しながら新しい歴史、陶磁器と新しい対話をすることになりました。

（　高　）

この「Translated Vases」のきっかけは 2001 年からなのですね。イタリアでの展示から始まって、ある陶工のところで、職人ですから気に入らないものは全部割ってしまうわけですが、それがもったいないということで、それをもらってきて再構築した。

ソウルのリウムにパーマネントコレクションとして永久展示されていますが、北朝鮮のフェリョンに有名な釜があるのです。そのフェリョンの土で焼かれたということです。

使う陶磁器の破片について、ある特定の人や釜など、破片の選び方にも何かこだわりがあるのでしょうか。

（　イ　）

伝統的な方式で朝鮮の白磁を再現する陶芸家を優先的に考え、３人の方からいただいています。

（　高　）

フェリョンの土、北朝鮮の釜の破片を使おうと思ったきっかけと、そのときに大変だったことがあれば教えてください。

（　イ　）

韓国では白磁に対する偏った愛情があります。私はフェリョンの陶磁器がとても好きで、それは日本ともとても関係があります。それで私はこれを作りたいと思いましたが、できるまでに３年かかりました。

（　高　）

北朝鮮から直接持って来ることができないので、中国の丹東から韓国まで運んだということで、とても大変だったそうです。南北分断という中でありながら北朝鮮のものを使ったのですね。

イ・スギョンさんはもともとソウル大学校で西洋画を勉強されたということですが、今行われている作業は仏画や仏像を使ったり、あるいは白磁を使ったり、伝統文化や宗教的なモチーフをよく使われています。東アジアの文化を意識するようになったきっかけについて教えていただければと思います。

（　イ　）

私は生きることへの根本に対しての探求心や知りたいという気持ちが強いのです。韓国の文化の中でもそういうものがありますが、韓国の伝統文化はそれほど残っていなく、結果的にお寺や宮殿に多く残っています。当然ながら、それは韓国、中国、日本の芸術とも通じるところがあると思います。

（　高　）

ここからは作品というよりもイ・スギョンさん自身についていろいろと伺います。

まず、アーティストになろうと思ったきっかけや、いつごろアーティストを目指されたのかということを教えてください。

（　イ　）

私が幼いころ、母はいろいろな仕事をしました。私は家に一人でいることが多くて寂しかったのですが、絵を描くことが好きになり、絵を描きながら慰めを得ました。それで、自然

と美術に進むことになりました。

（　高　）

イ・スギョンさんの経歴を見ますと、1987 年にソウル大学校の美術大学を出られたということで、当時の雰囲気を聞いてみたいと思います。学生時代、1980 年代だと思うのですが、ちょうど韓国はその時代に民衆美術が盛んだったと思うのですが、学生時代はどのような先生にどういうものを習っていたか、当時のクラスメイトの画家たちがどのような作品を描いていたか、また、それについてどう思っていたかを教えてください。

（　イ　）

80 年代の韓国は民主化運動でとても混乱していました。その中で私は民主化に参加するべきなのか、学生として学ぶのか、ジレンマを感じていました。私はデモ隊のための絵を描いたりして民主化運動に参加しました。混乱した時期の中で私は文学にのめり込みました。学校に行っても教授はあまり教えてくれませんでしたし、そもそも教授に会うことができませんでした。教授はその時期、思想的なことに集中していたり、あの時期は学生も教授もとても混乱していました。そのような時期を経ましたが、私はその時期がむしろとても役に立ったと思います。

（　高　）

1980 年代の民主化運動に伴って、例えば、民主化運動のモチーフの大きな絵を描いたりという、正に民衆美術が盛んな時代に学生生活をされたわけです。先生方はミニマル・アートなど、一時期日本でとてもはやったモノクローム系で、学校ではいわゆるモダニズムのモノクローム系の先生に教わって、外に出れば、民主化のデモの時代という、正にそういう時代に学生生活を送られたということです。

初めての個展が 1992 年に行われたということですが、これはソウルと東京で開催されています。どういう縁で日本で開催するようになったのでしょうか。

（　イ　）

最初の個展は「Getting Married to Myself」というタイトルで 1992 年に開きました。その後に東京で同じ個展を開きました。その当時、日本に対する憧れが強かったのです。しかし、当時は韓国では日本文化に対する拒否感みたいなものが多くありました。私は日本だけではなく、外国に対する憧れが強かったのですが、そのときにちょうど紹介してくれる人がいて、東京での個展を開くことになりました。そのときに村上隆という美術家が来て、日本語で話しかけてきました。

（　高　）

まだ村上隆がそれほど有名ではなかったときの話ですね。

先ほど台北での展覧会のことを教えていただきましたが、去年、同じく台北の当代芸術館[2]でK-P．O．P―韓国現代アート展に参加されています。そのときにはどういう作品を展示されましたでしょうか。また、その展覧会についても教えてください。

（　イ　）

あのときは美術館で現代美術の紹介をしましたが、高麗の仏画と陶磁器の作品を展示しました。

（　高　）

去年のグループ展に続いて今年、台北当代芸術館で、今、展覧会の最中ですが、そのあと高雄にも巡回されるということでした。

では、作品について、あるいはイ・スギョンさん自身について、何かご質問のある方、いらっしゃいますか。

（会　場）

今回の水と土の芸術祭では割れた陶磁器の破片を金継ぎでつなぎ合わせて立体作品を作り、それをインスタレーションするという作家がイ・スギョンさんのほかにも岸本真之さんという日本人の作家もおられます。その方の作品は都市の風景というか近未来というか、無機的な感じがするのですが、イ・スギョンさんの作品は命、生命を宿しているような何かの卵みたいな、非常に有機的な印象を受けました。何かそういう命や有機的なことが作品の中にあるのかお聞きできればと思います。

（　イ　）

陶磁器というのは機能的なものであり、そして心理的なものもあります。それが壊れてしまうと一つの破片に過ぎません。しかし、それを接着してもう一度作り上げることによって有機的になり、以前よりもっと強くなります。

（　高　）

今、生命力というお話が出てきました。私も旧二葉中学校の展示を見て、独特の生命力を感じました。作品に上から蛍光灯の光を強く当てているのです。本当に融通無碍にいろいろくっついていくわけですが、光が当たることによってとてもエロチックに見える、生命がみなぎる感じがとても強く出るのです。ライティングで作品の見せ方ということで工夫されているのでしょうか。

（　イ　）

私は蛍光灯の明かりが好きです。それは冷たいイメージもあり、実験室のイメージもあるからです。実際の展示では、人の目に刺激が少ないように照明を目の高さと同じにしていま

[2] MOCA Taipei

す。照明はとても気を使います。

（　高　）

蛍光灯の光が均一に当たっていて、とてもドライな光の中で見るのですが、こうやって融通無碍に増殖していくような、生命力に満ちた形がとても映えているのです。

ほかに何か、イ・スギョンさんに聞いてみたいことがありませんでしょうか。

（会　場）

先ほど、1980 年代に日本に対して憧れを持ったということなのですが、私たちから考えると何に憧れたのだろうと非常に不思議に思うのです。どういうところに憧れたのかを質問したいと思います。

また、台湾でいろいろと活動されていますが、台湾にも何かそういう憧れがあるのでしょうか。中国ではやってないようなので、その辺りの違いがあるのか、教えていただけるとありがたいです。

（　イ　）

人というのは禁止されているとますますその反動で好奇心を持つもので、その当時、韓国は日本製に対する禁止が多かったのです。物も文化も禁止されていました。私は芸術家としてそれに対する反抗心と好奇心が、禁止によってかえって刺激されました。日本のポップス、また化粧品や女性雑誌に出てくるさまざまなイメージ、そのときに 20 代女性が持っているいろいろな憧れなどを感じました。

台北で展示会をしましたが、そのときもとても強い刺激を受けました。アジアに対してもっと勉強しないといけないという気持ちになりました。台北に行くたびにたくさんのアイデアをもらいます。

（　高　）

中国についてはどうですか。

（　イ　）

中国では上海で 2009 年に一度展示したきりです。中国と台湾は全く違います。

（　高　）

他にどなたかありませんか。

（会　場）

作品の部材として使っている陶磁器のかけらの大きさや形は全く偶然できたものをそのまま活かすのか、それともこういう大きさ、こういう形がほしいということで後からご自身がまた割ったりすることもあるのか教えてください。

（　イ　）

破片は絶対に切らず壊さずそのまま使います。「THOUSAND」という作品を見ると、大きい破片はそのまま使いまして、小さいものもそのまま展示しています。それで作品のタイトルが「THOUSAND」になりました。

（　高　）

絶対に割らないのだそうです。すべて使うわけですよね。小さい破片は小さい作品に、大きい破片は大きい作品にすべて使って、非常にエコロジカルな作業をされています。

そのほか、何かありますか。

（会　場）

最近、日本では芸術祭が地方でも多くある中で、芸術祭イコール地域の活性化などを目的としているものがとても多いと思うのです。その地域活性化をアートでやっているイ・スギョンさんのアーティストとしての視点から日本での地域活性化はどういうものか、どういう印象なのか、質問させていただきたいと思います。

（　イ　）

自分の作品は自分のものではなく、神様がくださったものです。できるだけ多くの人に作品を見てほしいです。韓国でも小さい地方で開かれる芸術祭は必ず参加しています。むしろ大きな有名な芸術祭はそれほど大事にしていません。小さい芸術祭に参加するのが作家としての責任です。

新潟の芸術祭は「水と土の芸術祭」というタイトルが気に入りまして、参加することにしました。

（　高　）

東アジアで最初にやった芸術祭は光州だったでしょうか。1995 年に始まっています。今でこそ世界中に何とか芸術祭や何とかビエンナーレがたくさんありますが、韓国の光州が最初だったように記憶しています。その後、2000 年から越後妻有で始まって、2009 年から水と土の芸術祭ということです。今、お話があったように、地方で参加することがむしろ私の義務だという、とても心強いことをおっしゃっていただきました。

それでは、最後にどなたか一人いませんか。

（会　場）

私は疲れた人たちに眠りを与えたいというこの女の人の作品がとても面白いと思いました。女性ということで、現代は女性が生きづらい世の中と考えて感じていらっしゃるのかどうか、そのあたりを教えてください。

installation view, All asleep (2014)　(協力：OTA FINE ARTS)

（　イ　）

私自身、女性なのかどうかが疑問です。日本の女性もそうですが、女性はとにかく強い。男性作家と違うところは、男性は作品しかできないのですが、女性は作品も作るし生活もできます。それを見ると、やはり女性は増殖が可能です。

（　高　）

それでは、そろそろ時間になりましたので、この辺りで終了したいと思います。ありがとうございました。

Yee Sookyung（イ・スギョン）　本芸術祭参加作家

1963年韓国生まれ。ソウル大学校の美術大学にて絵画博士号修了。現在もソウルにて活動中。第６回光州ビエンナーレ(2006)、ARCO07(2007)、 第５回リバプールビエンナーレ(2008)、2009バンクーバービエンナーレ、2010釜山ビエンナーレ、そして第18回シドニービエンナーレ（2012）など世界的に活躍。日本国内では、「第１回金沢・世界工芸トリエンナーレ」（金沢21世紀美術館、2010）や「アジアをつなぐ-境界を生きる女たち 1984-2012」（福岡アジア美術館、栃木県立美術館などに巡回、2012）に出展。2015年、台北のMOCA Taipeiにて大規模な個展「When I become you」を開催。ソウル、ヒューストン、パサデナ等世界各地で発表を続ける。

高晟埈（コ・ソンジュン）　元新潟県立万代島美術館主任学芸員／故人

1974年埼玉県川口市生まれ。東京藝術大学美術研究科（芸術学専攻）修士課程修了。東京国立博物館等を経て、現在、新潟県立万代島美術館主任学芸員。専門はビザンティン美術史および北東アジア近現代美術。主な企画展に「ロマノフ王朝と近代日本」、「民衆の鼓動―韓国美術のリアリズム1945-2005」、「日韓近代美術家のまなざし―「朝鮮」で描く」等がある。